

待望の葛飾区立中央図書館、ついにオープン

—— 多数の来館者が真新しい本を手に長蛇の列 ——

友の会にも新しい会員が仲間入り



10月17日(土)、金町駅前に待望の葛飾区立中央図書館がオープンしました。“ゆとりある空間と最新機能を兼ね備えた都会的な図書館”というキャッチフレーズ通り、ICタグシステムやユニバーサルデザインを採用し、IT機器の充実、まさしく時代の先端を行く図書館の誕生です。

開館式典後の午後から来館者が殺到、広い館内には2日間で1万5千人を超える方々が足を運び、自動貸出機の前には、新しい書籍やCDなどを手に、一時、長蛇の列を作るほどの盛況ぶり。

開館翌日の日曜日からは毎週末、図書館主催のオープニ

ングイベントとして、作家や大学教授らによる記念講演会や幼児を対象としたお話会、さらにはブックトークが開かれ、多くの人たちが話や実演を聞いたり見たりしました。

オレンジ色のエプロンを着けた友の会会員も、11月8日までの土・日や祝日、午前10時から午後4時までシフトを組み、2か所の入り口付近での案内図やパンフレット配り、館内及び会議室への案内などに延べ80名近くが協力しました。その結果、14名の方々が新しく会員登録され、今後一緒に活動していただくことになりました。開館から11月8日までの3週間、来館者は延べ約10万人にも達し、新図書館への関心の深さを示しています。



「友の会ウィーク」の9日間、連日イベントを開催

ボランティア団体によるバラエティーに富んだ催し物

友の会主催のナイトシアターや見学会、講演会やシンポジウムも

10月31日(土)から11月8日(日)の9日間にわたって、中央図書館の開館を祝う友の会主催の「友の会ウィーク」が開かれました。区内で活躍する28のボランティア団体による人形劇や紙芝居、お話会、劇、朗読会や展示物の説明などバラエティーに富んだイベントが「おはなしのへや」や2つの会議室などで毎日開催され、図書館の全面的な協力を得て、延べ1,700名近くの来館者が参加しました。

さらに、期間中には友の会単独主催のナイトセミナー、2回のナイトシアター、幼児や小学生を対象にした“としょかんたんけんたい”、中学生以上を対象にした“図書館裏側ツアー”、そしてウィークのフィナーレを飾る4名のパネラーによるシンポジウムを実施・開催しました。

なお10月26日(月)午前10時からの「かつしかFM」の生放送番組に川島事業委員長が出演し、友の会の設立準備から現在までの活動などについてインタビューに答えました。また墨田図書館友の会から中央図書館を見学し、当会と交流したいとの要望があり、来年1月11日(月・祝)午後交流会が予定されています。



朗読会 (葛飾音韻ボランティアの会)

第1回ナイトセミナー

現代ビジネスの源流をたどる

— 江戸期から戦後期まで —

朝野熙彦



中央図書館のオープニングイベント「友の会ウィーク」の一環として、11月4日に第1回ナイトセミナーが開かれました。始めに川島事務局長から、この講演会が成人を対象とした「生涯学習塾」のスタートであるという紹介がありました。講演の要旨は次の通りです。

江戸時代には、今日のマーケティングの萌芽ともいえる産業活動が見られて興味深いものがあります。三井家による百貨店ビジネス、富山の薬売りによるリレーションシップ・マーケティングは今日から見ても優れたビジネス・モデルだといえます。明治期にはライオンによる歯磨きのプロモーション活動が行われるなど、日本では戦前からマーケティング活動が展開されていました。

さらに戦後期にGHQの主導のもとで品質管理と世論調査が日本に導入されることになったいきさつを紹介しました。1956年には日本生産性本部がマーケティング視察団をアメリカに送り、先進的な産業活動を学びました。この視察団は昭和の遣唐使とも呼ばれています。さまざまな歴史の偶然と紆余曲折を学び産業の源流をたどることは、現代のビジネスを理解する上で参考になるでしょう。

講演で強調したかったことは次の3つです。①歴史は語り手にとって都合がいいように語られがちである、②テーマをもって本を探すことは楽しい、③成人に対する図書館利用の呼びかけ。

最後に読書を通じて学びあう「サークル活動」を友の会の五十島さんが提案して講演会を締めくくりました。

[あさの・ひろひこ 葛飾図書館友の会会長 首都大(旧都立大)教授]

11月7日(土)

熱心に、そして興味津々で館内を巡り歩く

子供向け「探検隊」に十数組の親子が参加



幼児や小学生を対象にした子供向けの『としょかんたんけんたい』が開催されました。親子十数組が参加し、図書館職員を先頭に探検開始。会議室を見たあと、巨大な書棚が並ぶ閉架書庫に踏み込んだ子供たちはビックリ。

更に事務室へと移動しました。ここでは「毎週木曜日、買う本を選び、50～60冊を買っている」という職員の説明を受けました。そして探検隊はキッチンと並んだ本のジャングルのような一般書エリアを通過し、また“せきなびくん”や自動貸出機の使い方を教えてもらったあと、自動返却仕分機が動くガラス張りの部屋に特別に案内されました。ここでも子供たちは興味

津々。真剣に機械が返却本を処理している様子をジッとみつめていました。

そして新しい絵本がたくさん集まったこどもコーナーや児童書エリア、床暖房付きの「おはなしのへや」を見学。壁には毎正時、丸い文字盤から人形が現れる大きな仕掛け時計がかかっています。最後に会議室に集合し、職員から“なにか質問がありますか？”の問いに、男の子の“楽しかったです”の答えに参加者から笑いが起こりました。図書館から江戸小紋のしおりが参加者全員にプレゼントされ、探検は無事終了しました。

11月8日(日)

図書館ツアー「図書館ライフ」をより楽しく

自動仕分けシステムや閉架書庫内部も見学

中学生以上の大人を対象とした「中央図書館裏側ツアー」が行われました。十数名が参加したツアーは、図書館内部を職員の説明を受けながら探索しました。

会議室からスタートした参加者は、視覚障害者のための録音テープを作成する録音室、ボランティアルーム、図書館の管理や蔵書の選定・発注、ICタグの貼付や登録、他館への発送など様々な業務を行う事務室を見学した後、書棚が並ぶ一般エリアへと移動。ビジネスパソコンや個人閲覧席を予約する端末機「せきなび」の操作やハンディキャップコーナーの説明を受けました。

そして一階のブックポストに戻された貸出本が自動搬送機で3階まで送られる様子を見ました。自動貸出機の使用法を学んだあと、通常は立ち入れない自動返却仕分室の内部に入り、小さな窓から返却されベルトコンベアで運ばれた書籍が、次の貸出にまわるもの、書架に戻すものなどに選別され、さらに分野別のカゴに落とされていく様子を見張りました。

予約資料コーナーでは利用方法の説明を受け、本の倉庫ともいべき閉架書庫に入りました。20万冊が所蔵できるというこの書庫は、ボタンひとつで書棚が動くというすぐれもの。見学時には、来館者が多く、貸出冊数が予想を超え、書棚が空いてしまい、一部開架へ戻しているという説明にビックリ。

館内を一周したこの裏側ツアーは熱心な参加者の質問も出て、予定の1時間をオーバーして終了しました。



11月8日(日)

フィナーレは4名のパネリストによるシンポジウム 「人と人、人とまちが出会え、未来を作る図書館に…」



左から川島、谷部、坂、玉川、朝野の各氏

中央図書館オープニングフェスティバルと友の会ウィークの最終日、4名のパネラーを招いて『図書館でひらく まちの明日(みらい)』と題するシンポジウムが開かれました。川島事務局長の司会で、図書館と私たちの明日を語り合おうというイベントです。

はじめに図書館の玉川整備担当係長は開館までの経緯を中心に「何度も来てもらえる、そして長く居てもらう図書館にしていきたい」。次に谷部(やべ)葛飾学校図書館ボランティア連絡会代表は連絡会の発足から現在までの活動を紹介。「人と人との係わりが持つことが出来るシンボルや核となる図書館に」と語

りました。

更に俳優で区民劇団 ham 代表の坂(ばん)さんは「読書とも関係の深い芝居を通して、出会いの場、文化のメッカとしての図書館に期待したい」。

最後に朝野友の会会長は「本なしでは生きていけないのが人間だが、疑う材料としての本という位置付けもある。考え方や学び方を身につける、そしてお互いに学びあう生涯学習の場が必要で、図書館の果たす役割は大きい」と述べました。

そして図書館がまちの中に一体化し、人と人とが、また人とまちが出会える開かれた図書館になれば、心豊かな未来が開けてくると、パネラーの皆さんの話を司会者が何とかまとめて、“フィナーレはスタートだ!”と、20数名の参加者全員で最後を飾るにふさわしい(?) 3本締めで閉会し、すべてのイベントは終了しました。

いったい何人が来館?

入り口のセンサーがキャッチ



はて? どこかな?

図書館オリジナルの立ち上がり椅子。高齢者満足



屋内に庇が。上から猫が覗いたりしたらおもしろい



中央図書館で探してみよう!

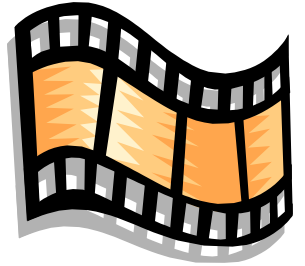
10月31日(土) & 11月6日(金)

熱心なファンに支えられた2回のナイトシアター

懐かしの『大菩薩峠』と『黄色いリボン』を上映

8月から活動を開始した「友の会ナイトシアター」チームによる初のナイトシアターがイベント期間中に2回、会議室1で午後6時半から開催されました。友の会ウィーク初日の10月31日(土)は市川雷蔵主演の『大菩薩峠』、11月6日にはジョン・ウェイン主演の『黄色いリボン』が上映されました。

会場には図書館の協力を得て集めた、作品に因んだ原作本や写真集などの関係書籍が展示されました。チームは上映機器の使い方に慣れていないため、大変苦労しました。来場者はそれぞれの作品を反映したのか、年配の方や夫婦で来られた方が多く見受けられましたが、今号では2回目を鑑賞した方の感想文を掲載します。

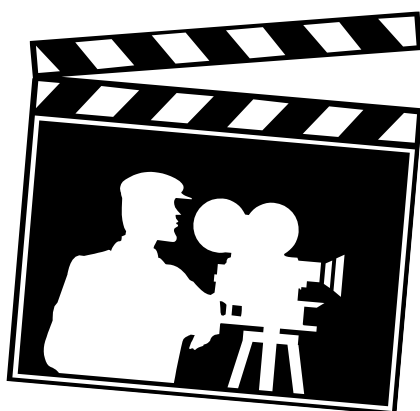


今回は洋画、それもアメリカ映画きわめ付きの西部劇です。ジョン・ウェインと言えばまさに西部劇・戦争映画の王者。『駅馬車』からスタートした戦後の映画ファンにとっては見逃せない逸品です。

さて2回目とはいえ新しい装置のスタンバイに手間取ったものの目出度く開演(ベルが鳴ると良かったですね。会場に流れてくるトイレのにおいありませんでしたが)。客席は約30人と、5分の入り。でも熱心なファンの視線に支えられて無事終了。この映画は主題歌が主役だったのですね。なつかしく、楽しい映画でした。

終わった後、ほっとする作品。それもその筈、騎兵隊とインディアンは仲良く別れ、死者はたったの4人という後味のよい映画。近頃の血みどろTVドラマや日本映画の反省材料にしてほしいと思います。ナイトシアターにふさわしい選択でした。

なお、ナイトシアターは邦画と洋画を順繰りに、毎月1回開催する予定です。今後の開催は12月19日(土)『父と暮せば』(宮沢りえ出演 2004年度作品)、来年1月22日(金)『地下室のメロディー』(アラン・ドロンの主演 1962年度作品)、いずれも午後6時半開演、場所は会議室1です。



葛飾区立図書館ホーム・ページにアクセス!

<http://www.lib.city.katsushika.lg.jp/>

「友の会通信」のバックナンバーが掲載されています。

「心に残る私の1冊」と言う事で、お話をいただき、さて心に残っている本があるだろうかと考えさせられました。近年は何を読んでも心を打たれると言う事もなく、前評判の良い本を購入しても、最後まで読みきった本がありませんでしたが、その中で2年余り前に出版されました「中田英寿 誇り」が私の中で唯一心に残った本です。徹夜をして本を読んだと言う事も学生時代以来でした。著者は小松成美さん。彼女の冷静で、誠実さのあふれる取材には頭が下がりました。一人のアスリートとしての彼「中田英寿」の生きざまや心模様を丁寧に描き、大のサッカーファンの私にとっては、実に心打たれる一冊でした。マスコミ等の彼に対する記事などを読み、ファンとしてはいつも心を痛めていた私でしたが、彼が20歳余でヨーロッパに移り、そこからいくつものチームに移籍し、日本人として活躍し、誰にも負けないサッカーに対する情熱。悩み苦しみ、サッカーにとりくむ姿勢。日本代表としての誇り、代表チームへの愛情、大事にしていた仲間、自分の引き際、彼の気持ち等々・・・実に爽やかに感動する一冊でした。

今でも目に浮かぶのは2006年FIFAワールドカップスタジアム・ドルトムントのピッチの中田英寿の顔と涙です。読みながらテレビ画面の彼の顔が思い出され、涙した事が昨日の事の様に思い出されました。

「人生は旅であり、旅とは人生である」の彼の旅立ちの言葉には感無量でした。この本を読み終え、若者にもぜひ読んで欲しいと思った一冊です。

(つるおか・さちこ 葛飾図書館友の会副会長)



「葛飾図書館友の会」で一緒に活動してみませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただき、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

入会にあたっては図書館に入会届けをご提出の上、年会費（一般会員 1,000 円、賛助会員 2,000 円）を下記の口座へ納入して下さい。なお図書館での直接納入はできません。

「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、21 年度年会費とご記入下さい。振替手数料は銀行窓口では 120 円、ATM からでは 80 円です。恐れ入りますが、

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

ご負担をお願いいたします。 ●問い合わせ・連絡先は下記の通りです。

図書館担当者（玉川さん、吉村さん、清水さん）Tel 03-3607-9201

多くの皆様のご加入をお待ちしています。

▼この五月、とある図書館に捨てられていた二匹の仔猫を引き取った。あまりに愛らしいので、猫ブログなるものを始めた。これを多くの人に見知らぬ四〇人の人が読んでくれる▼高校の頃にガリ版なるものがあり、それでガリを切って印刷機で紙に印刷し、ホッチキスで綴じた同人誌や詩集などを作成したものだった。やっと出来た二百部そこそこのもので、読んでくれるのは知人やクラスメイトであり、それを知らぬ人に届けるには多くの労力が必要だった▼インターネットが身近なものとなり、簡単な作業で個人が特定多数の人へ意見や情報を配信できるようになった。私のつたない猫ブログを楽しみにしてくるイタリア在住の人もいる。出版社にもちこまなくても、自分の書いた小説をブログによって多くの人に読んでもらう事も可能な時代となった▼犯罪や誹謗中傷の場となると、ネットの功罪が取りざたされているが、うまく活用すればこんな素敵なものはない。ちなみに、この「友の会通信」も図書館のHPで読むことができる。

色えんぴつ

(矢野広報委員)